



尋常小學唱歌
第五學年用
文部省

部類
種類
番號

十三世

K130.7
2
52

尋常小學唱歌

第五學年用
文部省

國立教育研究所
督屬教育圖書館

緒　　言

- 一 本書ハ本省内ニ設置セル小學校唱歌教科書編纂委員ヲシテ編纂セシタルモノナリ。
- 二 本書ノ歌詞中尋常小學讀本所載以外ノモノニ就キテハ、修身國語歴史地理理科實業等諸種ノ方面ニ沙リテ適當ナル題材ヲ求メ、文體用語等ハ成ルベク讀本ト歩調ヲ一ニセシコトヲ期セリ。
- 三 本書ノ曲譜ハ排列上其ノ程度ニ就キテ多少難易ノ順ヲ追ハザルモノナキニアラズ。是其ノ歌詞ノ性質上已ムヲ得ザルニ出デクルナリ。
- 四 卷頭ノ「みがかずば」金剛石「水は器」ノ三首ハ何レモ皇太后陛下ノ御歌ニシテ尋常小學修身書卷五ニ奉掲シタルモノナリ。「みがかずば」ノ曲ハ今回特ニ撰定シタルモノ、「金剛石」及ビ「水は器」ノ曲ハ學習院撰定ノモノニ係ル。

大正二年二月

文　　部　　省

目　　次

一〇 菅公	31
一一 三才女	33
一二 日光山	37
一三 冬景色	39
一四 入營を送る	41
一五 水師營の會見	45
一六 斎藤實盛	49
一七 朝の歌	53
一八 大塔宮	55
一九 卒業生を送る歌	57
二〇 みがかずば	1
二一 金剛石	3
二二 水は器	3
二三 八岐の大蛇	7
二四 舞へや歌へや	11
二五 鯉のぼり	15
二六 運動會の歌	17
二七 加藤清正	19
二八 海	23
二九 納涼	25
三〇 忍耐	27
三一 鳥と花	29

d=84

みがかずば



みがかずば
玉もかがみも
なにかせん。
まなびの道も
かくこそありけれ。

♩=92

金剛石 水は器

一コソガウセキモミガカズバ
二み一づはうつはにミシたがひて

タマノヒカリハソハザラム
そのさまざ一まになリぬなり

ヒヒトモマナビテノチニコソ
ヒヒとはまじはるともにより

マコトソントクハアラハルレ
ヨ一きにあしきにうつるなり

トケイノハリノタエマナク
おのれにまさるよきともを

ヌグルガゴトクトキノマノ
え一らびもとめてもろともに

ヒカゲラシミテハグミナバ
こころのこ一まにむちうち

イカナルワザカナラザデム
イmanaびのみちにすすめかし

金剛石

金剛石もみがかずば、

珠のひかりはそはざらむ。

人もまなびて後にこそ、

まことの徳はあらはるれ。

時計の針のたえまなく

めぐるが如く、ときのまの

日かけをしみて勵みなば、

如何なる業かならざらむ。

水は器

水はうつはにしたがひて、

そのさまぞまになりぬなり。

人はまじはる友により、

よきにあしきにうつるなり。

おのれにまさるよき友を

えらびもとめて、もう共に

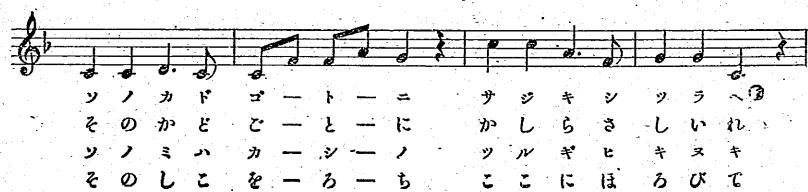
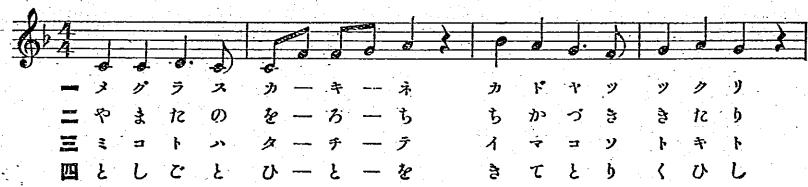
こころの駒にむちうちて、

まなびの道にすすめかし。

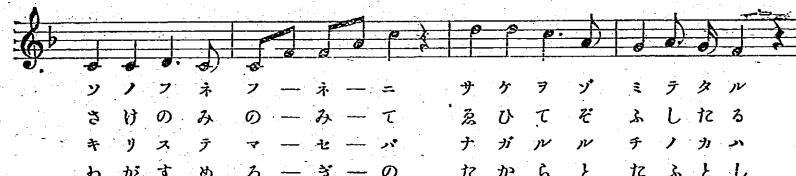
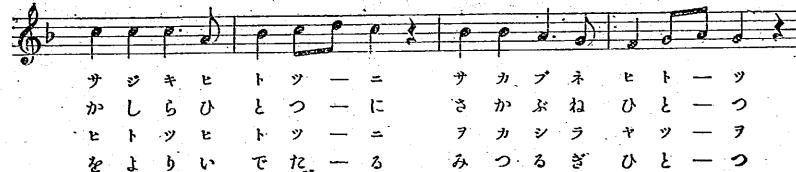
J=100

八岐の大蛇

八岐の大蛇



七



八岐の大蛇

八

一、八岐の大蛇

一、めぐらす垣根門八つ造り、

その門毎に棊敷しつらへ、
棊敷一つに酒槽一つ、

その槽々に酒をぞ満てたる。

二、八岐の大蛇近づき來り、

その門毎に頭とし入れ、

頭一つに酒槽一つ、

酒飲み飲みて酔ひてぞ臥したる。

三、尊は立ちて今こそ時と、

その御佩の剣引抜き、

一つ一つに尾頭八つを

切棄てませば流るゝ血の川。

四年毎人を來て取喫ひし、

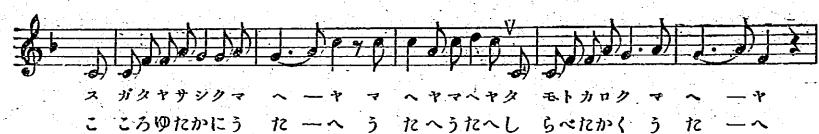
その醜大蛇こゝに滅びて、

尾より出でたる御剣一つ、

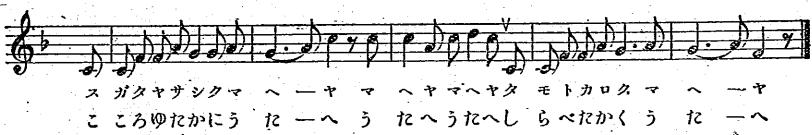
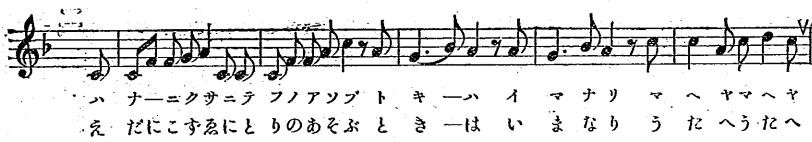
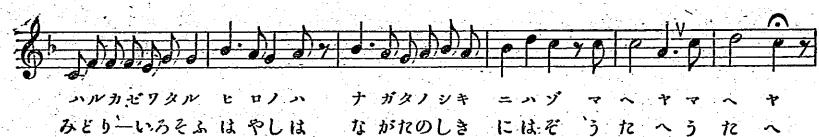
我がすめろぎの寶とたふとし。

♩=92

舞へや歌へや



二



三

二、舞へや歌へや。

一、花に宿れる蝶は今

眠さめたり。

舞へや舞へや姿やさしく舞へや。

舞へや舞へやたもと軽く舞へや。

春風渡る廣野は

汝が樂しきにはぞ。

舞へや舞へや花に草に。

蝶の遊ぶ時は今なり。

舞へや舞へや姿やさしく舞へや。

舞へや舞へやたもと軽く舞へや。

二、葉蔭に寝ねし鳥は早

ゆめも見あきつ。

歌へ歌へ心ゆたかに歌へ。

歌へ歌へしらべ高く歌へ。

緑色そふ林は

汝が樂しきにはぞ。

歌へ歌へ枝に梢に。

鳥の遊ぶ時は今なり。

歌へ歌へ心ゆたかに歌へ。

歌へ歌へしらべ高く歌へ。

鯉のぼり

=96

鯉のぼり

イヒモ ララモ カケセ ノルノ ナヒタ ミロキ トキヲ クソノ モハボ ナチナ ナミバ
カフク サネチ ナルモチ ナリュ ミミウ ノンニ ナカマリ ダミヌ ラエベ ヲテキ
タヨソ チタガ バカミ ナニニ カフニ ヲルフヤ アヲヒノ カレコ ゼニズ ハト
タモソ カララ クニニ オドラ ヨウド グゼル ヤムヤ ココソ ボアボ ヒガヒ リリリ

- 三、鯉のぼり
- 一、甕の波と雲の中波を、
重なる波の中空を、
桶かをる朝風に、
高く泳ぐや、鯉のぼり。
- 二、開ける廣き其の口に、
舟をも呑まん様見えて、
ゆたかに振ふ尾鰭には、
物に動ぜぬ姿あり。
- 三、百瀬の瀧を登りなば、
忽ち龍になりぬべき、
わが身に似よや男子と、
空に躍るや鯉のぼり。

四、運動會の歌

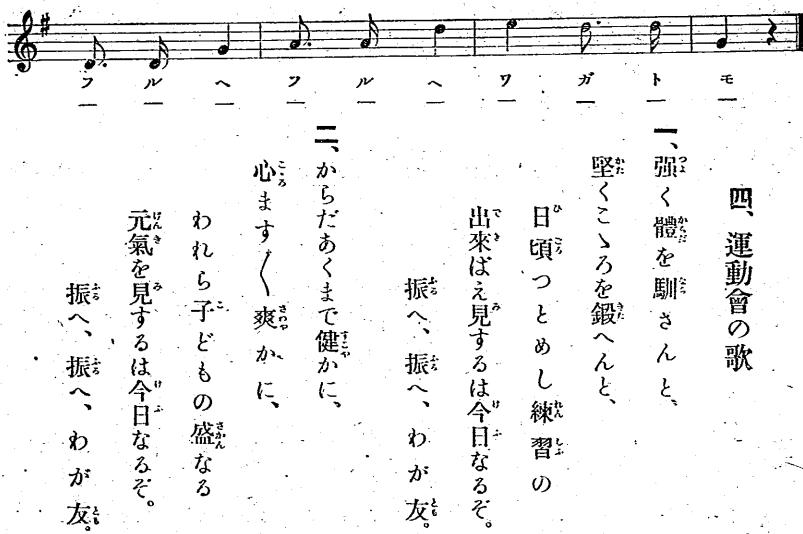
モー

ト一、強く體を馳さんと、

堅くこゝろを鍛へんと、

日頃つとめし練習の

出來ばえ見するは今日なるぞ。



運動會の歌

♪ = 88

運動會の歌



加藤清正

♩=72

加藤清正

一 カチホコリタルテキヘイヲ
二 ともあやふしとみをすてて

イツキヨニヤブルシヅガタケ
おもむきすくふうるさんや

シテホンヤリノズキイチト
ひやくまんよきのみんぐんの

ボマレハタカキトラノスケ
あらぎもひしぐきじやうくわん

ジャノメノモンノヂシバオリ
くろちにしろきななもじの

ジフジノヤリノムシャブリハ
めうほふれんげのはたかせに

ノチノヨマデノカタリグサ
ことくにまでもなびきり

五 加藤清正

勝ちほこりたる敵兵を

一舉に破る賤が獄、

七本槍の隨一と

譽は高き虎之助。

蛇の目の紋の陣羽織、

十字の槍の武者振は

後の世までの語りぐさ。

二 友危しと、身をすてゝ、

赴き救ふ蔚山や、

百萬餘騎の明軍の

荒膽ひしぐ鬼上官。

黒地に白き七文字の

妙法蓮華の旗風に、

異國までも靡きけり。

海

$\text{♩} = 84$

マツバラトボク キユルトコロ
二しまやまやみに しーるきあたり

シラボノカ一グハウ一カブ
いさりびひ一かりあ一はし

ホシアミハ一マニタカクシテ
よるなみき一しにゆるくじて

カモメハヒーククナミニトブ
うらかせかーろくいさごく

六、海

ミヨヒルノウミミヨヒルノウミミ
一、松原遠く消ゆるところ。
白帆の影は浮ぶ。

千網濱に高くして、
鷗は低く波に飛ぶ。

二、島山闇に著きあたり。
浦風火光淡く。

寄る波岸に緩くして、
見よ沙吹く。

見よ夜の海。見よ夜の海。

見よ夜の海。見よ夜の海。

納涼

J = 92

納涼

ヒカミトヤツヒリタノシアゲトセムホユニアキヲミバタニをノナコツガメヘシテラ
エミサフドザガリナボのミダはタナゴチシツフタキキカカクグベルシズヨメザカテシゼ
オテカヤラゼコのニハボラミガールラホナヒフルトシタツモビムトイシカクロシニクツ
コキツコキロユカヲルグオウガタダクガタミタレエガタミツエリゾツ

七納涼

一、一日の汗を湯浴に流し、
夕顔棚の下蔭占めて、
親子同胞一つむしろに心をおかぬむつび語り。
二、蚊遣のけむり軒端をこめて、
緑の葉ごし月影すゞし。
三、見わたし遠き青田の上を、
細波たてて吹来る夜風。
風に流るゝ螢火いくつ、
月影うけて消えつ見えつ。
消えつ見えつ、涼しや。

タヌスリゾツタレエガタミツエリゾツ
ムぬキツエビはツタレエガタミツエリゾツ
三、見わたり遠き青田の上を、
細波たてて吹来る夜風。
風に流るゝ螢火いくつ、
月影うけて消えつ見えつ。
消えつ見えつ、涼しや。

主は誰ぞ、ゆかしや。

忍 耐

♩=84

忍
耐

一ノヲナーガー レテノスエツ一ヒニ
ニミにふ一り一かかるうきこ一と一の

ウミト一ナールベキヤマミ一ヅ一モ
なほこ一の一うへにつもれ一か一し

シバシコノハシ シタクーグー ルナリ
かぎりあるみのちから一た一めさん

ミイザシノブナ リヤ一マ一ミヅモ
いざごころみんみ一の一ちから

二七

八、忍 耐

一、野を流れての末途に

海となるべき山水も、

しばし木の葉の下ぐるなり。

見よ、忍ぶなり、山水も。

二、身にふりかかる憂き事の、

まほこの上に積れかし。

限ある身の力ためさん。

いざ試みん、身の力。

忍
耐

元

J=104

鳥と花

鳥と花

一トーリニ ナラバヤ ミソラノトリニ
二は二なにならばやそのふのはなに

カスミヲ ワケテハヒバリートアガリ
さくらとさきてはあさひーにほひ

キーリヲ ワケテハカリートカケリ
きいくとさきてはつゆーに一かぎり

ハルトアキトヲカザラバヤ

九 鳥と花

一、鳥にならばや、み空の鳥に。
霞をわけては雲雀とあがり、
霧をわけては雁とかけり、
春と秋とをかぎらばや。

二、花にならばや、園生の花に。
桜と咲きては朝日に匂ひ、
菊と咲きては露にかをり、
春と秋とを飾らばや。

1=80 菅公

菅公

ニノにの
モロえう
クコがて
ラゴめう
ムマうこ
ヘジ・ぎら
サキ・ちせ
ルド・しの
ゲハ・をの
カニ・ちく
ヒミ・のさ
ホア・こえ
スラ・ち一
カ・ぎよ
ミ・い
ノ・を
マ・ひ
モ・ご
リ・と
ヲ・に
タ・は
シ・い
ツ・つ
ツ・つ
ツ・つ
レ
れ

二、のちを契りし梅が枝に、
東風吹く春はかへれども、
宴に侍りし秋は來ず、
菊の節會の後朝の
御衣を日毎に拜しつゝ、
配所に果てし君あはれ。

一、日かけ遮るむら雲に、
干すよしも無き濡衣を
身には著つれど、眞心の
神のまもりを憑みつゝ、
あらはれずして止まめやと、
配所に行きし君あはれ。

一〇、菅公

三才女

d=92

三才女 一 二 三

イミキ ロスサ カノイ モウノ フチミ カヨヤ キリノ コミオ ヴヤホ バビセ イトゴ ノト

エソミ ダデコ ニヒエ ムキノ スモ ピメト テテニ チヨクホニ ナエシ レヤヘ バモノ

イイナ トクフ モの一 カミニ シチャ コシノ ウトヤ グボヘ ヒケザ スレク ノバラ

トフカ ハミフ 一 みー バズコ イヒコ カイノ クニニ モとホ キのヒ マはヌ デはト

キアツ コマカ 一 エのー アはマ グシツ タルタリ コスコ トトト 一 一 ハケハ ノカノ ハテノ

イのハ クチナ ョのハ ノヨチ ハナト ルガセ カくモ ヲカラ ラララ ンン ルザザ

三才女

三四

一一三 才女

一 色香も深き紅梅の

枝にむすびて、勅なれば

いともかしこし、うぐひすの

問はば如何にと、雲るまで

聞え上げたる言の葉は

みすのうちより、宮人の

幾代の春か、薰るらん。

袖引止め、大江山

いく野の道の 遠ければ

ふみ見すといひし言の葉は

天の橋立末かけて

後の世永く朽ちざらん。

三、きさいの宮の仰言

御聲のもとに 古の

奈良の都の 八重櫻

今日九重に匂ひぬと

つかうまつりし 言の葉の

花は千歳も散らざらん。

一二、日光山

一、二荒の山下

大谷の奔流

金銀珠玉を

終日見れども

二、浮彫毛彫の

振ひし鑿の技

丹青まばゆき

心をこめたる

三、美術の光の

皆緑に

外國人さへ

樂園日本

皆

山

山

皆

山

皆

山

皆

山

皆

山

皆

山

皆

山

皆

山

皆

山

皆

山

皆

山

皆

山

皆

山

皆

山

皆

山

皆

山

皆

山

皆

山

皆

山

皆

山

皆

山

皆

山

皆

山

皆

山

皆

山

皆

山

皆

山

皆

山

♪=96

日光山

日光山



三七

III 冬景色

一、
冬
霧
消
ゆ
る
湊
江
の舟
に
白
し
朝
の
霜ただ水鳥
の聲
はして

いまだ覺めず、岸の家。

二、鳥啼きて木に高く、

人は畑に麥を踏む。
げに小春日のどけしや。

かへり咲の花も見ゆ。

三、嵐吹きて雲は落ち、
時雨降りて日は暮れぬ。

若し燈火の漏れ來づば、

それと分かじ野邊の里。

冬景色

♩ = 100

冬景色

一
二
三
サカア
ギララ
リスシ
キナフ
ユキキ
ルテテ
ミキク
ナニモ
トたハ
エカオ
ノクチ
モムス
シフレ
アモヒ
サシハ
シニテ
ノをク
ロタリ
シハフ
タゲモ
ネヒシ
フヒシ
タゲモ
ダニシ
ミコト
ヅハモ
トリビ
ノのモ
コのモ
エビレ
ハリコ
テヤバ
シズ
ヘロト
イミサ
ノモ
シナベ
キハノ
ズジ
メキカ
ザシワ
ダリト
マヘレ
イカソ

$\text{♩}=108$

入營を送る

アスラタケヲトオヒータテテ
ニセヤをひたひにたた一すとも

クニノマモリニメサーレタル
せにはおはじとちか一ひたる

キミガミノウヘウラ一ヤマシ
とほきそせんのこころもて

ノゾメドカナハヌヒートモアルニ
みかどのみたてとつ一かへまつり

メザルルキミコソホマーレナレ
はえあるつとめをつく一せかし

サラバユニケクニノタヌ

一四、入營を送る

一、ますらたけをと 生ひ立ちて、

國のまもりに 召されたる

君が身の上 うらやまし。

望めどかぬはぬ 人もあるに、

召さる、君こそ 警なれ。

さらばゆけ、國の爲。

二、征矢を額に立たすとも、

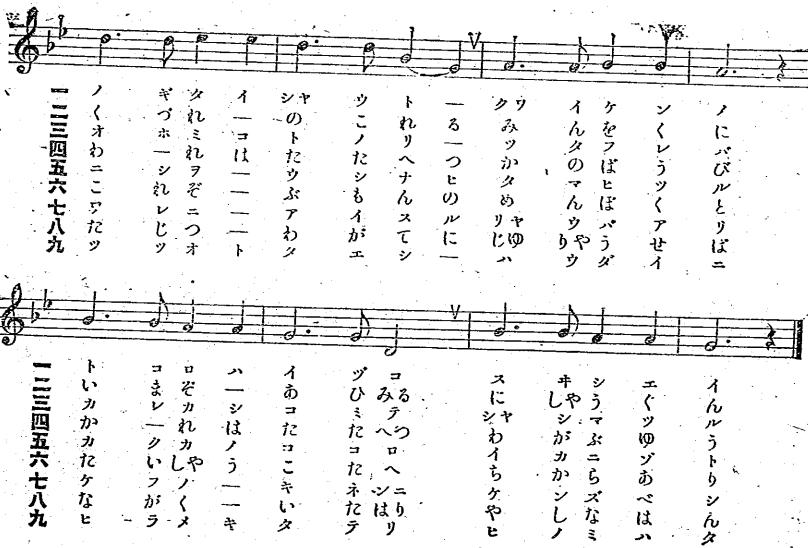
背には負はじと 誓ひたる

遠き祖先の 心もて、

みかどの御楯と つかへまつり、

榮あるつとめを 盡せかし。

さらばゆけ、國の爲。



水師營の會見

120

水師營の會見

テキニもヌニテリニ
リのカとデレシアロ
ナめソのイぞニリゴ
クつゴふヒレモマン
ヤなオケイソトあホ
ウヤとハはテシコグニユ
イとウキダガルスク
カヒシテタウヒシア
リヨノキカフリコサ
一一三四五六七八九

ルノテニリリテリ
セリミケウベタヒダ
ツジギトトコガガヒ
テチホチシロノタギ
スイオウセヨモシミ
ノンミルウ一のテ
キワグタハモんレ
ーんメーノモホーカ
テだミカコシナギワ

水師營の會見

四五

一五、水師營の會見

一、旅順開城約成りて、
敵の將軍ステッセル

乃木大將と會見の所はいづこ、水師營。

二、庭に一本棗の木、彈丸あともいちじるくくづれ殘れる民屋にて今ぞ相見る二將軍。

三、乃木大將は、おごとてかに、御めぐみ深き大君の大みことなり傳ふれば、彼かしこみて謝しまつる。

四、昨日の敵は今日の友語ることばも打ちとけて、

私はたゞへつ、かの防備。かれは稱へつ、我が武勇。

五、かたち正して言ひ出でぬ、『此の方面の戰鬪に

二子を失ひ給ひつる閣下の心如何にぞ』と。

六、『一人の我が子それぐに死所を得たるを喜べり。これぞ武門の面目』と、

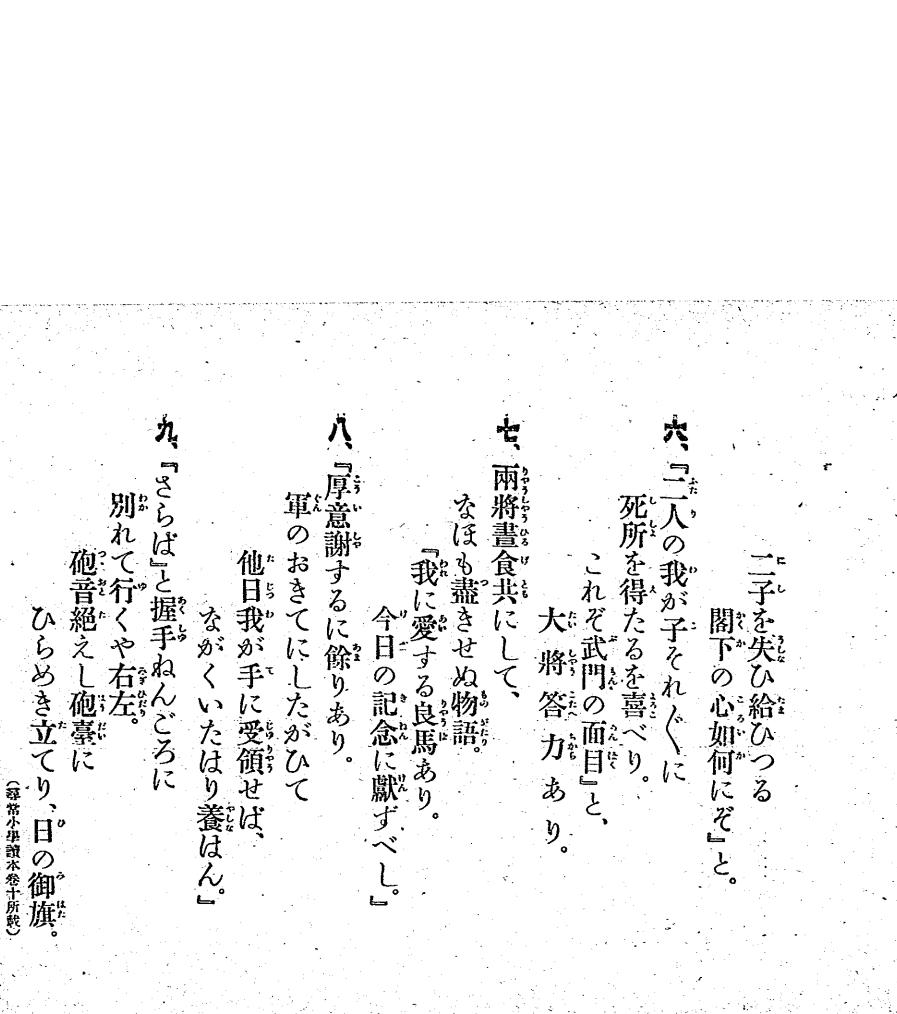
大將答力あり。

七、兩將晝食共にして、なほも盡させぬ物語。

『我に愛する良馬あり。今日の記念に獻すべし。』

八、『厚意謝するに餘りあり。軍のおきてにしたがひて他日我が手に受領せば、

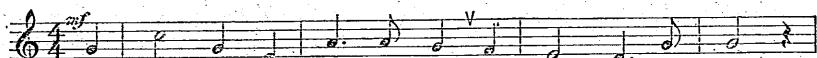
九、『そらば』と握手ねんごろに別れて行くや右左。砲音絶えし砲臺にひらめき立てり、日の御旗。



J=92

齊藤實盛

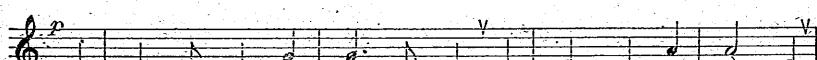
齊藤實盛



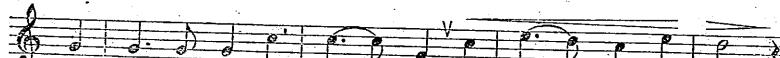
一トシハオユトモシカスガニ
ニにしきかざりてかへるとの



ユミヤノナヲバクダマシト
むかしのためしひきいでて



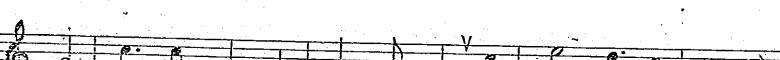
四九
シロ一キビンヒゲスミニソメー
のぞみのごとくこひえつる一



ワカトノバラートキソーピツツ
あか一ぢにしきのひた一たれを



ブユウノホマレヲマツダイマデ
こきやうのいくさにかがやかし



五〇
ノコシシキミノヲラシサヨ
きみ一がこころのやさしさよ

一六、齊・藤 實・盛

「年は老ゆとも、しかすがに

弓矢の名をばくださじと、

白き鬚鬚墨にそめ、

若殿原と競ひつゝ、

武勇の譽を末代まで

残し、君の雄々しさよ。

「錦かざりて歸るとの

昔の例ひき出でて、

望の如く乞ひ得つる

赤地錦の直垂を

故郷のいくとに輝し、
君が心のやさしさよ。

一七、朝の歌

一、朝日は昇りぬ、日は出でぬ。

海には、帆網をたぐり上げ、

追手に帆あげて船出する

二、朝日は昇りぬ、日は出でぬ。
海士人今や勇むらん。

山には、小牛を追ひながら、
朝露踏分け登りゆく

少女の歌や高からん。

三、朝日は昇りぬ、日は出でぬ。

町には、工場の笛鳴りて、
今しも薄らぐ朝靄に、

機械の音や響くらん。

朝の歌

♩=69

一八、大塔宮

一、水の刃
御腹に當てて、
堅唾かんづをのみて

忍しのぶびおはせし
經卷きょうまんかづき、
般若寺はんにゃあはれ。

二、山伏姿さんぶつ
破はる御足ごそく

落行らくぎきまし、
嶮けんしき道みちを、

三、鎧よろいの上うへに

流ながる血けしほ、
拭ぬぐひもあへず、

四、恨盡ごんじんさせぬ
日影ひかげも聞きき

酒さけ酌くわみまし、
三芳野さんぼうやあはれ。

五、恨盡ごんじんさせぬ
御最期ごさいあはれ、

立たてる矢や七しちつ、
建武けんぶの昔むかし

六、恨盡ごんじんさせぬ
日影ひかげも聞きき

紅染こうせんめめて、
熊野路くまのあはれ。

♪104

大塔宮

一九、卒業生を送る歌

一、許多の年月兄とし陸び。

姉とし慕ひし上級生よ。

日頃のつとめ效見えて

榮ある今日のよろこびや。

二、吾等に先立ち學を卒へて、

今日しも出立つ卒業生よ。

君等の面にあふれたる

希望の色のたのもしや。

三、吾等もやがては學を卒へて、

君等が行く道後より追はん。

ゆくての道のしるべして

正しきかたに導けや。

卒業生を送る歌

J=104

卒業生を送る歌

アワツ タララ ノにモ ノにモ
アママ ニナナ ムをヲ トビビ
キチハ ツだテ シキガ トさヤ
アケキ ネふミ トしラ シもガ

發行所

株式國定教科書共同販賣所

東京市日本橋區新右衛門町十六番地

印 刷 所

博文館印 刷 所

東京市小石川區久堅町百〇八番地

荻原勝次郎

東京市小石川區久堅町百〇八番地

發行者

代表者 大橋新太郎

株式國定教科書共同販賣所

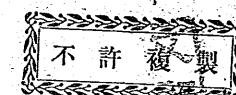
東京市日本橋區新右衛門町十六番地

著作權者 文部省

大正二年五月廿八日發行

大正二年五月廿五日印刷

大正二年
年度定價
金拾四錢
定價金六錢



發行者

